

～文化の日～ に上方文化を考える～  
**小山観翁氏、舞台から観た**  
**上方と江戸文化の違いと魅力を**  
**おいに語る**

こやまかんおう

講師：**カブキキャスター 小山観翁氏**

日時：**2007年11月3日(土)午後3時～5時半**

ごりょうじんじゃ

会場：**御霊神社儀式殿** TEL 06-6231-5041

**御霊神社**の創立は、太古大阪湾が深く入りこんで海辺はぬかるみ、芦荻が繁茂して圓江[つぶらえ]と云い円形の入江に創祀された圓神祠に始まり、嘉祥三年(850)の「文徳実録」に八十嶋祭の祭場が圓江でそこに創祀されたのが圓神祠とされ、八百年代後半の創建とされています。ご神威高く、上古天皇御即位の大嘗祭につづく八十嶋祭に預かり、後に土地が次第に固成して村を形成しその名も津村と転訛しました。

豊臣秀吉公の大阪居城と共に政治経済の中心地として発展し、諸大名が参集してその崇敬も厚く什器の寄進も相次ぐという歴史ある神社前に参加者が集合。

**午後3時・御霊神社 正式参拝**

3時に儀式殿に集合した参加者は、観翁先生を先頭に、隣の本殿へ移動。背後に秋の日差しを感じながら、参加者は皆神妙な顔つきで、席に着く。神職の祝詞やお祓いを受け、巫女さんの鈴の音が響く。観翁先生に玉串を献上いただき、参拝後は出口でお神酒を頂戴しました。口内に広がる清酒の雫が五臓六腑に、更には心中をも清めるように爽やかな心持になりました。



**午後3時15分～30分 園宮司より境内のご案内**



正式参拝後、本殿から出た参加者は園宮司から境内の史跡をご案内いただきました。

まずは御霊神社の前身である圓神祠が文禄3年(1594)年まで靱の地(現在の西区靱本町)にあったことを後世に伝えるため明治27年5月に建立された「靱の碑」について紹介いただき、元和元年(1615)作の神社の鳥居の両側に鎮座する青銅狛犬は若々しい姿や、嘉永二年(1849)作の一对の堂々とした燈籠を見学し、その鳥居下には明治17年(1884)から大正15年(1926)まで境内

にあった御霊文楽座を顕彰し床本を模した石碑となつて往時の船場の商人を賑わいを今に伝えています。



(絵) 大正時代に描かれた御霊神社と文楽座(現儀式殿あたり)客席は750席あり、大型ランプ7基で舞台を照らしていた。商家が集まる船場[せんば]に近く、大店の旦那衆の社交場や商談の場としても利用された。

**境内見学後、本殿前で小山氏と園宮司を囲んで記念写真**



**午後3時半より 儀式殿にて小山氏講演会**

**60年前の11月3日戦後初めて歌舞伎公演の幕が開く**

今月の文楽劇場では、吉田玉男師匠の一周忌として曾根崎心中の解説をするのに大阪に参りまして、今回こちらでお話させていただくことになりました。劇場は録音でございしますが、こちらは生放送でございします。



私、いままで名高い御霊神社に伺ったことがございませんでしたが、今回はたいへん結構なご縁をいただきましてお参りさせていただき、大変有難いことだと思っております。奇しくも今日は11月の3日でございしますが、お手元の資料に「仮名手本忠臣蔵」の番付がございします。右側をよくご覧いただきますと、昭和22年3月3日初日とございしますが、今年が平成19年、昭和ですと82年ですから、奇しくも60年前ちょうどこの日、当時の占領軍が許可して戦後初めて「仮名手本忠臣蔵」が、歌舞伎座がまだできておりませんので、東京劇場で上演された日でございます。宗十郎、吉右衛門、大阪からは梅玉がきて、今日初日だったわけでございます。翌年の2月にはご当地大阪の千日前の大阪歌舞伎座で、同じ「仮名手本忠臣蔵」が上演され、菊五郎と吉右衛門が抜けまして猿之助が入りました。大阪からは先代の中村梅玉と坂東十三郎がはいり、東京とは若干顔ぶれが違いましたが、東西で忠臣蔵が相次いで戦後上演されました。因みに、大阪歌舞伎座の2月1日初日の忠臣蔵は、夜の部の最後の九段目を、三代目中村梅玉がお夏を演じておりましたが、途中で体調をこわし休んでしまい、翌月この世をさりましたので、梅玉さんの最後の舞台になりました。戦後初の東西の番付をお持ちの方は少ないので本日の資料とさせていただきます。次は七代目の松本幸四郎という方が七十七歳で勸進帳の

弁慶をされたのですが、私も七十七歳になりますが、今はたいしたことはないのですが、昔は七十これ稀なりといわれていたころ、弁慶などという一旦花道に出たなら、六法を踏んで入るまで休むことができない大役で、それを記念しての番付ができました。翌年七十八歳の時に同じく松本幸四郎さんが「暫」という作品でたいへん大きな衣装を着て演じたので劇場で記念して作った番付です。

次の資料はこれは珍品中の珍品で、明治 44 年に帝国劇場が初開場した柿落としの時に使われた座席表でございます。ご存知の通り、日本の芝居は棧敷席で畳敷き、皆履物を脱いで上がったものですが、明治時代は文明開化になったので西洋の様式を取り入れて帝国劇場が出来ました。ですから、全席椅子の劇場が日本に出来たのが帝国劇場が初でございます。私の祖母が女優第一号の森津子さんと友人でして、先代の水谷八重子さんも尊敬していたという女優でして、友人ですからチケットを引き受けて友達にも声をかけて劇を観にいきますので何とはなしに家に座席表がありました。ご参考までに添付しておきました。

### お能と歌舞伎が好きな祖父母と劇場に通った幼年時代

私は芝居に携わっていますが、別に役者の家柄ではなく平凡な家柄でしたが、ただ親や祖父母が芝居が好きでして、一方の祖父母はお能が好きで、一方の祖父母は歌舞伎が好きでしたが特に上方歌舞伎が大好きでした。

祖母は初代の鴈治郎の追っかけをするほど好きでしたので女房役の梅玉も大変好きでした。ですから東京に上方歌舞伎が来ると、何回もいくので孫の私も連れて行かれこのような不思議な野郎が出来上がったわけでございます。

また一方の祖父母はお能が好きで、当時は能舞台を各家で持っていたのでよくお能の発表会があり、お能があつて狂言があつてお能があつてと続くのですが、お能には幕がございませぬ。幕がありませんのでお能が一つ終わりますと、とたんに紫色の煙が濛々と立ちます。当時禁煙ではないのでタバコの煙だらけになっている中、同じ流儀を習っている人たちばかりで互いに顔馴染みですので、枱がきつてあるお隣さんとかで挨拶を始めた、声を限りに呼び交わすなか、休憩とかがございませぬのですぐに狂言が始まります。私なんぞが祖母と一緒にいると、周りでは「久しくお目にかかりませぬが、お変わりございませぬか。」と尋ねると「入院しておりました。」「入院、それはいけませんな。病院を選ばないといけませんな。」等と話をしている間に、狂言師は能舞台に来ていまして演じ始めます。それでも話は続きます。舞台を観る様子のないおじさんが「それは医者がですな。ワッハハ。ワッハハ」「医者に気をつけないと、誤診というのが、ワッハハ。ワッハハ。ワッハハ」。こっちの枱では「孫が大学を滑りまして、ワッハハ、ワッハハ」という調子でしたから、子供だった私は祖母に「あの人たち変だねえ」と言うと、祖母は「そうじゃないよ。狂言というものは、少しぐらい面白くなくても、笑ってあげるのが礼儀なの。だからあの方は、しゃべっているようで、ちゃんとお耳で狂言を聞いていて、どこで笑うのかちゃんと判っていらっしゃる。そこにくるとちゃんとお笑いになるので、実に礼儀正しい方なのよ」と教えてくれました。

私は子供心に「狂言はなんと惨めな芸なのだろう」と思いました。ところが先月の 28 日に NHK ホールで、古典芸能鑑賞会がございまして、「唐相撲」という珍しい狂言を野村萬斎がやって大拍手で大笑い。少しぐらい面白くな

くても笑ってあげないと言っていたお狂言が、戦後芸術的な価値が大きく見直されました。歌舞伎なら座頭が三番叟をつとめますが、笛などは誰がやるにしても三番叟にあわせませぬ。ところが茂山千作さんにお聞きしましたところ、笛の音に振り付けを合わせるようになるといいますから、伴奏の方に主役が合わせるのですから不思議です。

過去の歴史をちょっとご承知おきされますと、面白いかと思ひます。

### 戦時中命がけて彦根から京都南座までの歌舞伎見物

歌舞伎は祖母の影響で梅玉さんにファンレターを書きましたら、昔の役者さんは律儀なもので自分でもって返事をくれて、それがご縁で、晩年でしたが梅玉さんとも親しくさせていただき芸についてもお話をうかがえました。文楽の山城少掾さんともお付き合いをさせていただきました。東京にも歌舞伎役者はいたのですが、祖母の影響で上方の梅玉さんらに興味をもっていました。

更に上方歌舞伎が好きになる機会もございました。戦時中、父親の役所が滋賀県の彦根に疎開し私も住むようになりまして、彦根といえば上方歌舞伎の京都・大阪の目の前でございましたのでよく芝居を観にきました。だんだん戦争が激しくなり交通事情が悪くなり、電車の切符が手に入らなくなってきました。親父に今でも感謝しているのですが、親父が役所にいってうまいこといって緊急公務の証明書ももらってきてくれたので切符を手に入れてくれたので、それを持って彦根の駅に行くのと旅行調整管という人が構えていて、この人の印の証明をもらわないと切符を買うことができないのですが、緊急公務ですから、「はい、ご苦労さん」と判子をポンと押してくれます。それとばかりに SL にぶら下がって京都駅まで行くことが出来たのですが、帰りの切符も買っておかないと今夜中に帰れなくなります。彦根駅とは想像もつかないような行列で、京都駅では調整管という人がたくさんの机を並べていて、審査が厳しく、親が危篤だといつてもそんなの信じない。だから、「チキトク、カエレ」という電報を持って行って一泣きすると判を押してくれるのです。だから一人一人がああでもないこうでもないと言うから長く時間がかかって仕方がない、判子押してもらうにも 3 時間程かかる。だから朝 5 時 40 分くらいの彦根発の SL に汽車賃が 2 円 50 銭払って乗りまして、1 時間 40 分かかってともかく京都へ辿り着き帰りの切符を買うために 3 時間並び緊急公務ですから「ご苦労さま」と 3 分で判子を押しもらい、それから「銀閣寺」行きの市電に飛び乗りまして、「四条河原町」で降りて南座にかけつけると、ちょうど 11 時頃になるわけです。

ところが、SL なるものを敵の飛行機が知っていて、通勤電車だと狙って小さな戦闘機が沢山飛んで来まして集中砲火をあびせるわけで、ある時空襲警報が鳴って列車が止まりました。「空襲警報発令。座席をはずしてそれを担いで車輪の下に潜ってください」と号令がかかります。座席を外し、それを盾に身を隠しているのですが、その頃は日本は負けそうですから、応戦する飛行機がなくて、向こうのやり放題。ヒューと飛んできては、パラパラと焼夷弾を撒き散らします。座席にまともに鉄砲弾が当たったらこんなもの何の役にも立たないじゃないかと思ひますけれども、弾が地面にあたると砂利がかなり飛び跳ねるので立てかけた座席がそれを防いでくれました。座席に身を隠しながら、「ああ、なんでこんな危ない思いをしてまで芝

居を観にいくのだらう」と流石に乗っていた SL が襲撃を受けた時には思いました。

夏の暑い日に、京都の南座で今の坂田藤十郎のお父さん、二代目の鴈次郎さんが「伊勢音頭」を昼夜やったのですが、戦争中に伊勢音頭なんかをなかなかやる人がなかったのですが、私は例のごとく緊急公務の証明書を持って出かけました。昼の部を観終わって京都駅にもどってくると、人の山です。切符を持っているけれども西の方から汽車がこないの改札口が閉じられ人があふれていました。芝居が3時頃に終わって、駅の広場で新聞紙を広げて10時半頃まで黙々と7時間半座っていたのですが、やっとのことで汽車に乗って家に帰ったのが夜中だったのです。後で聞いたらその日広島に原爆が落ちたので、西の方からくる汽車の手配がなかかなつかなくったのだということを知りました。私はあんまりえげな命がけではないのですが、戦時中も芝居を観て歩いたのでございます。

### 祖母の一言がイヤホンガイドの原点に

今月の文楽劇場でやっています艶姿女舞衣 酒屋の段を中村梅玉さんがはるばる大阪から登場しまして、中村吉右衛門さんが特別出演した舞台を祖母と一緒に観に行ったことがあります。「今頃は半七さん、どこでどうしてござろうぞ・・・」というお園の口説きにとりかかる前に、お舅さんが喘息の発作を起こしたのでお湯を飲ませ、お舅さんは奥の間に入っていき、お園の役の梅玉さんが湯飲みに残ったお湯を土間に捨てに行くのですが、一緒に観に行った祖母が「ご覧、大阪の役者は、芸が細かいねえ。あの湯飲みの中に、舅さんにどれだけ飲ませ、どれだけ残っているのか。湯飲みのあけ方で分かるねえ」と言ったのです。私は「へえ～、芝居ってそういうのを観るものなのかあ」と思って、それから注意して舞台のいろんな物を観るようになりました。時には徳利が気になって、中からどれだけの酒が出てくるのだらうと注意してみると、不注意な役者にいい役者がいないということに気がつきました。

今思うと歌舞伎と一緒に観に行った祖母とのその一言が、イヤホンガイドをやる「原点」ではないかと思えます。イヤホンガイドというのは、この頃は観劇される二人に一人はお借りいただけるようになりました。そのイヤホンガイドというものをお使いになって、お邪魔にならないようにするわけですが、隣のおじさんがそっと耳に囁いてちょっとした事を言うというようなものでございます。ですから、祖母がやっていたことなんですね。

イヤホンガイドの解説者では、知っていることをすべてしゃべろうとする者もでございます。ところがお客様は芝居を観ている訳ですからそんなに詰め込まれても困るわけでございます。

ですから、イヤホンガイドはある程度知識が出来たら、この話はこれだけの材料があるけれども、どれを捨てようかということがわかるようになれば解説者として一人前になるかと思えます。

でも失敗もでございます。かつて舞台初日にイヤホンガイドを生放送でやることができました。最初は四十人くらいしか借り手がなくて、「いつ潰れるか」というのがもっぱらの評判でした。それが今や観客の半分がお借りいただけるようになったのですが、上り坂になったかならないかの頃でございますが、たまたま大河ドラマ「風林火山」の市川亀次郎君が女形でもって踊るために上手から走り出てきました。私はその日生放送ですから、「亀次郎君が出てきまし

た。ちょっと足がでていますねえ」というとイヤホンガイドを聞いていらっしゃるお客様が「わ～」とお笑いになったので、びっくりしました。そんなに借りていらっしゃるのだと思いましたねえ。それで、録音ではそこを摘んでとっちゃいました。

もっと失敗したことは、中村歌六という人がいます。弁慶の役だったのですが、義経らがひっこんだ後に、花道で弁慶が「知盛の霊」を沈めるためにブーツと法螺貝を吹くのですが、よく調べてみるとどうもそうじゃない。幕末に七代目の市川團十郎が弁慶をつとめたそうです。七代目の團十郎というのは「勸進帳」の初演者でした。

「弁慶」というのは本来あまりいい役ではありませんから、ものはずみで何故か團十郎が演じることになりました。團十郎としては、俺がやる限りには何か洒落たことをして皆に一泡ふかさなくてはならないと思ひ、一人だけ後に残ってポーッと法螺貝を吹きはじめたそうでございます。よく考えてみたら、あんな出鱈目な話はない、みんな「法螺」だということになりますと、イヤホンガイドで私が言ってしまったものですから、満場大笑い。気の毒なのは歌六君で、なんで笑われなくてはならないのか？とかいうことになり、その部分はカットだということになりました。だからたまには初日におこしになるとそういうことがあるかもしれません。

### 秀吉の朝鮮征伐で出雲大社が経済危機

どちらにしても歌舞伎は上方から出てきたもので、出雲のお国という男装の女性が元祖だといわれています。その出雲のお国がどういう足跡を辿るかといえますと、歌舞伎をご覧意になったりご研究になればよけて通れないところだと思います。

まず手近でいいますと皆様が他の演劇をご覧になるとちょっと違って、歌舞伎を観にいくときはおしゃれをされる方が多いと思います。戦前とかは本当に着飾った方が大勢多くいらっしゃいました。何で歌舞伎を観るのにそんないい格好をしていくのだらうと思うと、昨日や今日の話とは違うわけです。

慶長2年か3年、1607年8年、出雲のお国に遡ってその謎が解けるわけです。出雲のお国というのは何者かといえますと、これは出雲大社のお巫女なのですが、なぜ歌舞伎の元祖になるかということ、太閤秀吉が朝鮮征伐というものをします。これはお国と直接関係ないのですが、関係がある。というのは、出雲地方というのは、出雲大社の社領と申しまして、神社の領地であるのですが、大きいえば毛利さんの領地にして、太閤秀吉は朝鮮征伐をするとするとべらぼうに費用がかかるので、それを各大名に分担させるのですが、毛利さんも費用の捻出に困ってキョロキョロ見回してみたら、出雲大社という五千石相当の自領地を持っているの目をつけて、五千石といえますと旗本でも相当上の方です。同時に旗本とか大名になりますと、徳川家からがんじがらめになっていて、家来を何人も置かなくてはならないとか、参勤交代をしるとか、江戸へ行っている事を在府と言って、国許に帰っているのを在国と言って、一年毎に国と江戸へ行って一生終わるのが徳川時代の大名旗本でした。旗本は大名よりも緩いのですが、それでも軍役というのが課せられていました。それと比べると出雲大社は何もしないで自領地から上がるものがそのままそっくり自由になるのですから、実情で言うと五万石相当ほどの実益が出る領地を持っていました。武士の場合ですと、

加賀のお大名が百万石だとしても経費がかかるので、実質殿様が自由になるのは一割の十万石ほどしかないわけです。出雲大社に目をつけた毛利さんは、「この度太閤殿下が朝鮮征伐をなさるに当たって我々にも応援を求められているので、出雲大社の領地を半分貸してくれ」という申し出をしてくれました。貸してくれていわれたところで、返してくれとは催促できないので取り上げられるのは目に見えているけれども、泣き泣き二千五百石を毛利さんに巻き上げられてしまった。

### 阿国は出雲大社の巫女からどさ回り

さあ、そうすると、今日の明治神宮とかのように大都会になりますと参詣人が多いわけですが、今でさえあまり便利とはいえない出雲の国。あんなところで、胡坐をかいていてもお賽銭なんぞは集まるわけがない。これはよくあることで、熊野三山、出羽三山とか、不便な所では座っているはお賽銭が集まらない。特に出雲はそのような一大事件があったので、出雲大社が慌てまして、お巫女さんを加えた基金募集団を全国を派遣することになったのです。何故お巫女さんが必要かという、お神楽をやりながら賽銭を集めました。

当時は、テレビもないし何も娯楽がないものですから、緋の袴を履いたお巫女さんがジャンジャンやるだけでも大した娯楽で、村々を回りますと非常に喜ぶ。喜ぶばかりか庄屋の息子とかは、『地元にはあんな娘はいないなあ。一緒にご飯食べれないかなあ』と思ったりして、庄屋の息子からデートの申し入れがあったりすると、村に乗り込んでお世話になっていますから肘鉄砲を打つことができないので「ご飯ならよろしいですわ」ということで出かけていくのですが、最初のうちはいいのですが、お酒が入って宵を明かすと翌日には想像もつかないご寄付が舞い込んできて、はじめのうちは仰天したり飛び上がって喜んでいますが、それを出雲に送金します。そうするとあそこは成績優秀だネエ、感謝状くらいやらなきゃいけないということになってくるのです。お巫女も最初のうちは感謝状をもらって喜んでいますが、そのうちに考えてくる。丸ごと出雲へ送金しないで、自分の懐にも残しておこうと考えるようになり、一割二割なら、出雲大社もちょっと成績が落ちたなあと思うくらいですが、三割割り引いて送金されるようになれば気がつかないわけがない。といいますのは、今全国に「養老の瀧」という一杯の飲み屋のチェーン店があるでしょう。あの社長は一代のたたき上げで、ある雑誌の対談を頼まれてお会いしたことがあるのですが、いかにして儲けたかという話を始めた。要するにお酒にお湯を入れる。一割二割のお湯をいれているうちは大丈夫ですが、三割お湯をいれるとお客も気がつくよとおしゃってらっしゃった。

出雲大社も同じような理屈で三割以上だと気がつくわけで、そうするとお巫女さんたちはばつが悪くて出雲に帰れなくなってしまい、お神楽も新作なんて考えるようになって上手になって鼻息も荒くなって「こんなばつの悪い思いするんなら巫女を辞めちゃおう！」と辞職して自由の身になり、身を立ようと思うとお金があるところを回らないとだめなので、北陸道を行くと佐渡島へ行き着きます。当時の佐渡島は、あれほど金が採れたことがないというほどのゴールドダッシュに沸き立っていました。流刑人まで借り出して金を掘っていたのですから、男ばかりで溢れかえっていたので、お国一行が乗り込むと昼間に女五人の

ラインダンスとばかり踊りをみせると、「左から三人目がいいなあ」「いや、右から三人目がいい」と同じだったりするのですが、昼は踊りを夜は男相手にしこたま稼いだわけです。そういう風に稼いだお巫女くずれの女性が沢山いたであろうなかで、出雲の阿国として歴史に名を残したのはどういう訳かといいますと、たいていの女性はお金を儲けてうれしいなあうれしいなあと浮かれているうちに病気を背負い込んで死んでしまったりするわけですが、阿国がそこで断然違ったことは、「私がここで踊ってたくさんお金をもらえるのは、私の芸ではなくて、ただの女として観て騒いでいるだけだわ。芸を買ってくれているわけじゃない。日本国中どこへ行っても通用する芸を極めたいものだ」と思ったことが他の女性と違うところです。

さて、そう思うとお金だけたまる男ばかりの佐渡島に居てはだめです。今でもドサ周りという言葉がありますが、よくテレビのタレントが姿を消して全く出てこなくなったりしたときに「テレビはご無沙汰で、どさ周りに行ってました」というのは、佐渡は芸を期待する客ではなくて、景気がいいからお金をたくさんくれる人が多く居たということで、金の為に行かなくてはいけないという佐渡周りが逆になって「ドサまわり」と今でも自嘲しているようになったようでございます。

### 出雲の阿国が豪華絢爛な衣装を纏い京都へ

阿国は佐渡でしこまたお金を儲けて、京都へ出てきました。京都に出てきて北野天神の所に広大な空き地がありそこに小屋掛けで、阿国一座ではなく、北野津嶋守と名乗っていました。後に徳川幕府が権力を持ちますと武士の名前をむやみに芸名に使うことはできなくなりましたが、当時は幕府がいろいろ干渉すると「東の代官が騒ぎおって」と京都のお公家さんの機嫌を損ね心象を害することに気を使っていたころでした。徳川は豊臣から政府を掠め取ったので徳川も後ろめたいところがあるわけでございます。後ろめたいので、政治批判は禁じ暫くのようなものがでてくるのですが、徳川家康が考えたのは、藤原や橘がごじゃごじゃ言わなくなる方法は、徳川から天皇をだすことだと思うわけです。二代将軍に和子姫がいて、公家の嫌がらせで正子と改名するのですが、姫を適当な天皇に押し付けて出来た子供を天皇にすればいいと思ひ実践するのですが、それまではお公家さんがたくさん居る京都は徳川家にとってアンタッチャブルな地で、阿国が何をしようが徳川はなかなか手を出せなかったのです。佐渡で儲けた阿国は京都で豪華絢爛な衣装や髪飾りを身につけて舞台にでるので、見物人もみすばらしい格好で見物にいけなくなる。観客もおしゃれして観にいったのですが、その名残で歌舞伎をおしゃれして観に行くようになったという長い話でございます。

歌舞伎というのが、出雲系の芸人によってはじめられたのはほぼ疑いのないことでございます。何故それがわかるかといいますと、皆様が出雲大社に行って正式参拝しますと、まずは御神殿に通されます。そこで、太鼓になります。「ご低頭ください。」頭を低くしてくださいと言われる。太鼓がなっている間に頭を上げてはいけません。ドロドロドロと太鼓がなりおわり「お直りください」と言われて頭を上げると、神主さんが出揃っていてお祭りがおわるとまた「ご低頭ください」と言われるので頭を下げているとドロドロドロと太鼓がなって「お直りください」で頭を上げたときは神主さんが一人もいなくなっています。出雲大社はあの

世を司る神様に仕えているので、あの世に出入りしなくてはならない。あの世とこの世を行ったりきたりしなくてはいけない。見えてはまずいわけです。皆さんお気づきのように、歌舞伎とかで、お化けがでるときにはドロドロドロという太鼓の音でますね。かりに本当にお化けがでるとしたら、皆様が夜道をトボトボ歩いていて、お化けがでたとしても、ドロドロドロという音がしますかねえ。たぶんフーと出て、「ああ」と思ったらいないんじゃないですかねえ。出雲で使っていた太鼓の音が歌舞伎で使っているので、出雲系の芸人によって作られたのは間違いないだろうといわれています。

阿国が女歌舞伎を盛大に京都でやっている間に、家康は和子姫を天皇に嫁がせやっとな出来た子は女の子でした。武士の時代になり、お公家さんには満足な諸領地がないので段々と貧しくなってきました。お公家さんはお金はほしいのですが、プライドがあるから「お金がほしかった」などと口が裂けても言えない。ですからお公家さんのご機嫌伺いには京都の幕府の出張所長である京都所司代が出向き、「ささやかながら、金一封を差し上げるようにと江戸から早馬を持って伝達がございました。軽少でございますが、御受領の程を」と頭を下がるとお公家さんは喉から手が出るほどお金はほしいのですがプライドがあるので、迷惑そうな顔をして「麻呂はそのようなものを受け取る謂れがない」と辞退するのですが、「お受け取りいたさなくば、手前役目の表が合い成り立たず切腹せねばならず、曲げてどうか御受領願ひ奉りますように」と更に頭を下げると「切腹、麻呂が受け取らなくば切腹となあ。人の命には返られまい。この度は曲げて受領いたすであろう」と公家はいい、所司代は「かたじかない」と平伏すのですが、お金持っていったほうがすまながって、受け取るほうが踏ん返り返っている。何と言っても公家さんは上品ですからねえ。武士が憧れるわけです。公家と接する所司代なんぞは、「公家さんは何と上品なものよ。あのように振舞わねば・・・」と思い、家来が物を持ってきたら公家を模して「折角の貴方の申し出であるから、今回は受領いたすであろう」と家来に対してそっくり返る。ああいうのが上品だということで、もう少し下のほうから金品をもらうとさも嫌そうな顔をして受け取り、これが順繰りに連鎖反応を起こして行って、終に辿り付いたところが踊りの師匠。踊りのお師匠さんのところへご祝儀をお持ちになると、「あら、そんなことしなてくもよかったのに」と忌々しそうな顔をして「そうでございますよけど、これはほんの心ばかりでございます」というと「そうかい、なんかいただきましたよ。神棚に上げといてくださいなあ」というのですが、玄人と素人の境目は、差し出された金一封の中身がどれだけあるかを一目睨んで分かるわけで、さも嫌そうな顔をして受け取るというのはそういう習慣があるわけで、一つのことを説明すると歴史を語らなくてはならないわけです。

### 上方では坂田藤十郎、江戸では市川団十郎が大活躍

出雲の阿国は傾城会というのをやったそうです。傾城会とは上方歌舞伎の原点で、上方歌舞伎の元は坂田藤十郎がやったやつし事だといわれています。阿国が演じた恋の駆け引を、藤十郎は更に芸術的に纏め上げてこしらえたものです。だから坂田藤十郎は上方歌舞伎の元祖だといわれています。三代目の鴈治郎がどうして何がなんでも坂田藤十郎を襲名するという。六十年来の知り合いで、彼はとても健康で病気知らずですから元気の秘訣は聞くと、「坂田藤十

郎になるのが生きがいですから」といい健康管理には気をつけていたのです。藤十郎が途絶えて今で四代目ですが、二代目三代目を飛び越して初代の坂田藤十郎を目指していたわけです。ですから襲名の時は最初ちょっと何代目ということを出していましたが後は削っていました。彼の理念でしっかりした考え方をもっているということが分かるわけでございます。

上方で坂田藤十郎が活躍しているときに、少し年下なのですが江戸では初代市川団十郎が芸風は全く違いましたが活躍していました。初代の市川団十郎は歌舞伎の世界では元祖と言っています。初代といわないのが本当だそうです。元祖市川団十郎は乱暴者で言葉使いが荒いので敵を作り、恨みをもって刺し殺されてしまうほど乱暴な人だったらしいのです。荒事というのを発明して、昔はお大名さんが役者を呼んで食事なんか出来たらしい。変な話ですが、本来は身分が違いすぎて同席するなんてことはできないのですが、芸人さんは特例になって食事の席などに招かれたのですが、流石の団十郎もお大名のところへ行けばおとなしくしているのでしょう。



ところがお大名が「荒事とはどういうものかねえ」と聞くと団十郎が「皆様で一斉に謡をうたっていただけませんか。それに合わせて荒事の見本をお見せいたしましょう」といだったので、謡い出すと捻り鉢巻をして、どかんと襖とか障子に体当たりをして見栄を切る。家来が

驚いて「団十郎、乱心いたしましたかあ」と騒ぐと、殿様は「かまわぬ、続けよ」と面白がって続けさせさんざんに座敷の襖や障子を破ってご褒美をいただいて帰ってきた。団十郎はそれを光栄にして「構わぬ」というマークを作ります。市川家成田屋の浴衣地に「構わぬ」と染め上げられている謂れでございます。

### 藤十郎の庭に運ばれた松の逸話が語る京都人気質

そこで面白いのは京都は全国的にはプライドは高いけれども、お財布の紐は固いと思われています。野次喜多なんかを見ましても、京都の知り合いを訪ねていくのですが、「やあよう来てくれまして」とそこまではいいのですが「やあ、昨日来てくれはったら美味しいものが仰山おましたのに」と言われ、昨日来たらよかったかという「おとついで来てくれはったら」ということになり、野次喜多では京都の知人を訪ねていったばかりに何の持て成しをうけないばかりか、立替金があったのを思い出されてお金まで取られてしまうのです。

しかし、京都の財布の紐が固い以外にも訳がある。京都の人はもともとそういうものではなくて、豪快な人たちがいたのです。現に坂田藤十郎はその最後の記念碑だと言われています。豪快そのもので、ある時石山の観音様にお参りにいくのですが、帰り道煙幕をはって宴会をしている侍の一団と出会い、目礼して通り過ぎようとする藤十郎であろう呼びとめ酒の相手をする事になり宴がたいへん盛り上がったので、何か欲しいものはと聞かれ返事にこまり記念に松の木を頂戴できないかと言いました。それは石山寺の大きな松ですから持ち帰ることはできず、お礼は言ったものの酒の上での余興であると忘れてしまったある日、

家の前が騒がしい。聞けば石山寺から藤十郎の家に松の大木が山科を越えて運ばれてきたというのです。ところが路地が狭くて木が庭に運べないと聞くと、藤十郎は両脇の家の塀を壊して運びこみ、後で塀を付け替えさせていただくことにしようといっって松の木を庭に運び込み植えたというのです。その話は、今の京都のイメージではありません。私は藤十郎という人は昔の物心両面から最高だった京都の名残の記念碑だっただろうと思うのです。と申しますのは、日本三大遊女。江戸の高尾、京都の吉野太夫・大阪の夕霧といわれていますが、夕霧はもともとは京都の島原にいたのですが、大阪に住み替えたのです。住み替えたというのは夕霧のような高級な遊女を京都の人が経済的に抱えきれなくなったのです。伏見から大阪に向かう船に夕霧が乗り込む時に京都の人々は押しかけて見送り「京都もこれでしまいやなあ」と呟いたといひます。徳川家の初めは京都のお公家さんに気を使って機嫌伺いにお金をばらまいたりしたのですが、天皇家とも血縁が結ばれたりすると次第に徳川家はお公家さんに気を使わなくなり京都の景気も悪くなり、夕霧が経済の中心となっていた大阪に住み替えたのだといわれています。

### 芸能は世の流れ時の勢いと深い関わりがある

上方の芸は優雅で、上方歌ははんなりしています。生田流の箏曲は謡曲から伝来しているものがたくさんあります。例えば、お座敷に芸者さんと呼んで騒ごうと言うときでも、上方では宴席でドンチャカ騒ごうという雰囲気ではありません。江戸のお座敷では賑やかです。思いついたのが蔵屋敷というもので、江戸には蔵屋敷はありません。大阪には豪商がたくさんいました。豪商は各大名が国許でとれたお米や産物を大阪に持ってきて一先ずそこにしまっておき、船場の豪商と相談して売りさばいてもらって現金化するわけです。豪商たちは大阪に赴任してきた蔵屋敷の役人を招待して顔つなぎをしなくてはならない。何度かの申し出を断りきれず、警戒しながら豪商の接待を受けている侍に酒が程よく回ったところで、次の襖が開いて控えているのが綺麗どころの芸妓たち。初対面で警戒している侍相手に芸をするわけですから、スチャラカホイホイというような芸はできない。「無礼者！」と商談はぶち壊しになるので、武士の嗜みである能楽などの謡曲を芸妓がきっちり舞うと、武士も見とれて話の糸口がつかめます。

ところが藩も警戒していて、汚職事件を起こす前に人事異動をします。蔵屋敷の役人の任期は短いもので、それを繰り返しているのです、上方舞のお能のものが廃らなかつたのではないかと私は思うのですが・・・。ですから江戸と大阪とは商売の成り立ちが違います。従って芸も違って来る。江戸と上方と一口にいいましても百里の彼方にありますので、それだけ違って来るものでございましょう。一番大切なことは世の流れ、時の勢いと芸とは無関係ではないということです。芸だけ取り出してそれだけ語ろうと思ってもそうはいきません。

例えば曾根崎心中でございしますが、たくさん解説書を読んできましたが、中心になることを一つも書いていません。何が大事かというとなれば油屋九平次という男が最初から徳兵衛をひっかけようと計画をした。そのために実印を落としたといっって内緒で解印届けを出したりしているのを徳兵衛はそれに気づかなかつたのですが、人を見る目がなかつたのです。友人の九平次に手元にある三百文、今で言う三百万円を貸すのですが、友人だから証文などは要

らないという徳兵衛に、九平次は利息はいくら高くてもいいからお前さんのいいような証文を書いてくれといひ、ついでに油屋九平次と俺の名前を書いてくれと言っって印を押します。せめて自分の名前は自分で書くようにと九平次に徳兵衛がいえばよかつたのにすべて同じ筆跡になり、証文所の文言も九平次の署名まで徳兵衛が書き、印は紛失した印が押してある。ですから、徳兵衛が印を盗んで押して偽造した証文書で九平次に迫つたという図式になってしまふ。相手にはめられたのですから、それを撤回するのは現在でも不可能だと思います。ですから、商売人の多かつた当時の大阪のお客さんも「わしらもそんな手口には気をつけなあかんあ」と思ひながら見物したと思ひますよ。吉田玉男さんという人は非常に理屈屋でして、理論性全として文章も聡明ですから、近松の作品も理論性全として眺めていた。徳兵衛は吉田玉男を置いて他にないというのがわかるわけでございませう。

江戸と上方がちがう。どちらがいいということはありませんが、江戸時代には中でも大きく違ふのは、江戸には徳川家の将軍が歴代いて、この将軍は豊臣秀頼から政権をちょうまかしたというのは説明のしようがない、弁明のしようのない後ろめたさがあつたので、政治批判を極端に嫌がり、荒唐無稽のものしようとしたのです。徳川幕府の勢いを受けて江戸時代の芸能の江戸と上方の芸は異なつていったと思ひます。

本日はこういうご縁をいただきまして、文楽とも縁の深い御霊神社でお話できましたことに感謝いたします。また劇場にも足をお運びくださいませ。有難うございました。



文楽や歌舞伎を楽しむときに、イヤホンガイドは私の必需品。解説者の中でも、観翁さんのガイドは語りすぎず、見所・聞かせ所がきわめて的確で、舞台上で展開している物語は勿論、その前後の物語の流れも織り込んでの解説は「ああ、そうだったのか！」の発見多数。更に観翁節ともいえる、ゆったりとしていて歯切れのいい江戸前のしゃべりが耳に心地よく、舞台を何倍も楽しめる。しかしそこはイヤホンガイド、声は聞こえど姿は見えずで、一度ご尊顔を拝したいと思ひ切つてお願いしてみたところ、大阪での収録後のお時間を頂戴することができた。

奇しくもその日が11月3日文化の日、それも60年前のその日に、歌舞伎の幕が上がつたという日だといひ。空から爆弾や投下される恐怖や、愛する人々が弾丸に倒れる悲劇から開放され、言論や表現の自由を許された平和の幕開けでもあつた日に、明治末から大正にかけて御霊文楽座があつた神社で園宮司のご案内頂き、上方や江戸の文化を考える機会を与えていただいた。正式参拝では巫女さんの真っ赤な袴の後ろ姿に斜めから薄いベールのような秋の日差しが差し込み本殿に響く鈴の音を聞いた後に出雲の阿国の話を聞き、何故着飾つて歌舞伎を観にいくのかから京都人気質など、改めて芸能がそれぞれの時代背景を切り取りながら変遷していったかといひ視点もガイドいただき思ひ出深い文化の日となつた。(原田彰子)

**参加者：一般** 安藤ひろ子・井崎節子・和泉雅一・伊藤喜久子・伊藤圭子・岩本康子・植田一重・大城戸晴美・大平美保子・岡野忠弘・岡持やす子・金澤忠俊・鎌田令子・川橋豊・北野俊・北橋忠宏・榊田恵介・木田信生子・薦田美紀・鈴木法子・的場恒夫・的場敏子・橋本晴江・羽田昌弘・松井征子・松田正弘・松本寿美子・水野玲子・目黒栄子・森下光進・安田行秀  
**塾生** 秋山建人・井上章・下野謙・杉山英三・中村孝夫・原田彰子・東口恵子・森欣子・山口信男・米川俊信

